

## 第8分科会

### 子どもとともに作り出す

### 環境構成

～子どものつぶやきから見えてくる環境構成～

助言者 金 娟鏡 (鹿児島大学教育学部准教授)  
司会者 平山ひとみ (吉野幼稚園)  
問題提起者 安樂 ゆか (大谷幼稚園)  
記録者 寺脇 未来 (大谷幼稚園)  
記録者 吉富 愛奈 (大谷幼稚園)  
ホスト 永井 千治 (辻ヶ丘幼稚園)  
ホスト 宮内 貴大 (和光幼稚園)  
運営委員 野村 修 (和光幼稚園)

#### 【研究課題】

保育実践

#### 【研究・研修の視点】

『幼稚園教育要領』に示されている通り、幼児期の教育は「幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行う」ことが基本である。また幼稚園は、そこに集う子どもたちの安心できる生活の場であり、あそびの場であり、居場所でもある。そのような中で、子どもたち一人ひとりが安心してあそびこみ、その意欲が満たされるように環境構成することが、保育者の一番大切な役割だと考える。子どもたちの願い（内面の思い）と保育者の願い（保育に対する思い）が一致したときに、その環境が子どもたちの「居場所」と言えるのではないだろうか。

本園では、子どもが自分であそびを選び、あそびこむことができるような部屋作り、あそび環境の構成に取り組んでいる。その際には、子どもの興味・関心に応えることができるよう、一人ひとりの声（つぶやき）や内面の思いに耳を傾けることを大切にしている。

しかし、保育者が作った環境が、子どもの興味・関心と一致することもあれば、保育者の予想や見立てとすれ違ってしまいうこともある。また、環境構成をしていく保育者の視点も多種多様で、チームで保育をしていく上で、保育者間の意思疎通を図りながら、環境を再構成することはなかなか難しいと感じている。ここで言う“視点”とは、子どもの実態や子どもの動線、子どもの目線、季節感等である。どこを重要視するかは保育者によって違いがあるが、「子どもの居場所づくり」という視点はどの保育者も持っているようだ。

今回機会をいただいた研修では、環境構成の際にそれぞれの保育者が大切にしてきた視点や願いを知り、その上で本園において大切にしたい視点や願いとは何か、改めて考えていきたい。また、保育者一人ひとりが“自分には見えていなかった視点”に気付き、新たな角度から保育を見つめることで、園全体の保育の質の向上を図りたい。

#### 【研究の手がかり】

- ・ 「環境構成」について、保育者間で認識の共有を図る。
- ・ 「子どもと共に作り出す」とはどのようなことか、考える。

#### 【研究計画】

◎令和4年度

- ・ 事例を通して、園として大切にしたい環境構成の視点について考える。

◎令和5年度

- ・ 自然との関わりを通して、健康な心と身体を育むための環境構成について研究する。

## 【発表の概要】

### 1 研究・研修テーマのとらえ方

本園では、子どもたちが生活の中で何気なく発することば（＝つぶやき）を、子どもの表現の一つとして捉え、保育者はその一つ一つに耳を傾けるよう心がけている。子どもの「つぶやき」から感じ取った思いや興味・関心が、環境構成のヒントになることも多い。

保育者は、今日の前にいる子どもの興味・関心は何なのか、思いを活かすためにはどうしたらいいか、見立ての違いはどこにあるのか等を見直し、柔軟に環境を再構成していくことが求められる。本研究では、子どもの「つぶやき」から広がるあそびに着目し、そこから保育者がどう環境構成をしていくかということについて追求していきたい。

### 2 研究の内容

(1) 環境構成する際に園で大切にしたい視点や願いについて考える。

(2) 実践例を通して、「子どもと共に作り出す環境構成」とはどういうものか考える。

① クラスの1つの遊びの展開と環境構成について、子どもの「つぶやき」をひろい上げ、環境構成に反映させていく。

② 子どもたちの様子（写真・動画）や「つぶやくことば」を記録し、子どもたちの興味・関心に寄り添い、応えることができたか、できていない場合どう再構成するか、担任間で話し合いを行う。

③ ②で話し合ったことを職員全体で共有し、課題の原因はどこにあるのか、「子どもと共に」作り出すことができていたのかを考える。

### 3 研究の方法

(1) PDCA サイクルに基づき、1つのあそびの展開と環境構成について、「場（空間）」「子どものつぶやきから見えるイメージの違い」「かかわりからみえること」の3つの視点から考察し、環境の再構成をする。

(2) 実践から見えた子どもの育ちを“幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿”にそって振り返りをする。

### 4 実践例

年長5歳児 ごっこ遊びの展開

### 5 まとめ

今回の実践を通して、保育者は、子どもの実態や「つぶやき」からクラスのおあつまりの中で話し合いを行ったり、環境を再構成していったりした。あそびが日々変化していくにつれて、子どもたちのたくさんの育ちを実感する一方で、子どもたちの思いを丁寧に聞き取っていくと、保育者と子ども、子どもと子どもの中でイメージのズレが生じていることが分かった。

子どものイメージに寄り添って遊びを展開することは、①子どもの「つぶやき」に耳を傾け、イメージを推測し、遊びの展開を予想する（Plan）②環境を整え、実際に遊んでみる（Do）③子どもの姿を観察し、イメージにズレはなかったか振り返る（Check）④（人的・物的）環境を再構成する（Action）ことの繰り返しだ。そして、それがまさに“子どもと共に作り出す、寄り添う環境構成”であり、保育者の大切な役割なのではないだろうか。今回の研究で見えてきたことを、これから環境構成をする際にも大事にしていきたい。

### 6 今後の課題

(1) 子どもの様々な興味・関心に応えるためにも、主観にならないよう保育者間の連携を図りながら子どもの観察記録をとり、共有し、環境の再構成に活かしていく。

(2) 話し合いから遊びを広げることにはこだわりすぎず、目に見えない子どもの「～したい」という思い（願い）を大切にしていく。

## 【討議の柱】

- ・環境構成をする際に大事にしている視点や願いは何か。
- ・保育者の主観にならないようにするためにどんな工夫ができるか。
- ・保育者間の連携をはかる際、どんなことに気をつけているか（クラス、学年、園全体等）。

## 【討議内容】

### 1 問題提起に関する質疑応答

(問) 使っている保育室は空きの保育室を使っているのか。また、朝の会や給食の時の様子も教えてほしい。

(答) 保育で使用しているのは年長組の部屋である。スペースが必要なときは、廊下や隣の保育室を使わせていただいている。朝の会をする時や給食の時は柵を動かして広いスペースにしているが、自由遊びの時は写真のような環境構成で行っている。

(問) 大谷幼稚園では、一日を通して自由保育を行っているのか。

(答) 年間を通して、いろいろなコーナーを構成して活動をしている。絵本コーナーや机上あそびができるコーナー、製作コーナーなど1つのあそびではなく様々なあそびを子どもが選んで楽しむことができる環境を作っている。

(問) 保育室にはコーナーがいくつもあるということだったが、学年ごとにコーナーを構成しているのか。また、コーナーごとにねらいがあれば教えて欲しい。

(答) 各クラスの担任がそれぞれの保育室に願い・ねらいを持って環境を作っている。子どもたちが興味を持ってほしいものや興味のあるものを環境に取り入れている。その中で、子どもたちがやりたいあそびを選んで遊んでいる。

### 2 グループ討議

#### (1) 環境構成をする際に大事にしている視点や願いは何か。

- ・保育室や環境に制限がある中で、連続したあそびをどう工夫して行うということが共通の課題として上がった。決められた活動をする中でも子どもたちがしたいあそびを取り入れるよう時間を工夫して保育を行ったり、後日続きが出来るように環境を作ったりしている。
- ・環境構成をする際に、子どものあそびやすさや年齢・実態に応じた興味関心を取り入れること、安全面に配慮した環境づくりを大事にしている。具体例として年齢・実態に応じた興味関心を取り入れるには、年中・長クラスはつぶやきを保育にとり入れ、年少少・年少少クラスは保護者の方に家でのあそびは何をしているか聞いて保育に取り入れるようにしている。また安全面では、テープカッターは刃を奥に向けて置く、ハサミは年齢に応じて保育者が預かったり、道具箱に入れて子どもが管理したりしている。
- ・発達段階に応じたあそびの提供や展開を考えて環境構成を行っている。例えば、物の貸し借りなど友だちとの関係性に着目したり、色の認識やハサミの使い方など発達の視点などをどう取り入れるか考えたりと、個々の特性に応じた環境構成を心掛けている。また、全てを与えるのではなくあそびのきっかけを与え、子どもの自主性を育てることを心がけている園もあった。



ホスト会場の様子

(2) 保育者の主観にならないようにするためにどんな工夫ができるか。

- ・ 子どもたちの考えに耳を傾け、自由な発想を生かすために必要な材料を用意したり、環境を整えたり事前の準備が大切である。また、それぞれの園でカリキュラムが違うため、それぞれの思いを大切に保育をすればいいのではないか。
- ・ 子どもが主体となるように興味のあるような環境を提供し、自由に遊べるように工夫している。あそびが見つからない時は保育者が一緒に探したり、子ども同士で教えあったりして保育を行っている。また、保育者間の連携として、各コーナーを保育者1人が見守るようにし、気になることはメモをして週一回の職員会で共有するようにしている。
- ・ 保育者主観にならないように子どもたちの声をできる限り拾い、子どもたちの興味のあるものを保育に取り入れている。コロナウイルス感染対策としてお泊り保育の代わりに、経験保育という普段できない活動を行う日を設けている園があった。その活動の中に4・5月で子どもたちが興味を持っていた物を取り入れたり、子どもたちの実態を考えて計画したりしていた。また、保育者同士の意見を共有できるように、補助の保育者にも意見を聞きながら話し合い、子ども主体となるように心がけている。

### 【助言者のまとめ】

幼稚園教育要領に示されているように、「環境を通して保育を行う」ことは教育・保育の原則でありキーコンセプトである。しかし、幼児教育・保育における「環境」をどう捉えるかは幅広い概念である。発表園でも明確ではなかったことに気づかされたようだった。幼児教育・保育における「環境」は、物的環境（物理的に可視化できるモノ）や人的環境（子どもを取り巻く人々のこと）といった「有形財」と、保育者が意識していないもの（ヒドゥンカリキュラム）や保育者の思いや願いといった「無形財」のものに分けられると考える。

環境を構成していく際の視点や具体的配慮は様々であるが、保育者の経験年数が増えるにつれ、個々の心の安定など子どもの深い心情への視点をも含め、俯瞰的に捉えた配慮が見られるようになる。日頃から立場・年齢・経験年数の異なる保育者が繋がり、関わりを深めていくこと（保育者間の連携）により、複数の視点で子どもを捉え、洞察することを契機に保育環境を構成していくことが望ましいといえる。環境を通して行う教育・保育は、子どものみならず保育者への働きかけでもある。園全体として、やればできる雰囲気や認めてもらえる場所であるのかということ、同僚性は重要である。

また、環境の再構成は、環境に関わる子どもの様子から、その環境が「ねらい」に合っているかどうか照らし合わせ、「ねらい」に対する環境のあり方を見直したり、「ねらい」を修正したりして、環境を構成し直すことである。そのため、PDCA サイクルを行うことで変化させ続けること、保育者自身の(子どもの心を理解し解釈する)主観を大事にしなが、自分の主観を疑う「主観の切り替え」(捉え直し)をする意識が大切である。また、間主観的アプローチにより、主観のすり合わせをし、子どもの見方や援助に自分の主観だけではなく他者の視点をもたせることや多面的な「子ども理解」が育つ機会に繋がってほしい。

「子どもとともに作り出す環境構成・再構成」は、子どもと保育者或いは、保育者同士の間主観の形成過程であり、喜び、揺れや戸惑いを感じながら、よりよい保育に向かっていく道りである。また、組織としてそれを実現できる仕組み作りともいえる。園全体で話し合い、そこで得られた気づきを次の環境構成・再構成に生かしているかどうか、各園で考えるきっかけにしていきたい。



ホスト会場の様子